

ガザ停戦、2025年10月

ほぼ正確に2年後、アムネスティ・インターナショナル、国境なき医師団、国際ジェノサイド学者協会、そして国連調査パネルがすべて明確に**ジェノサイド**と形容した事態が、ついに終結しました——少なくとも一時的な休止に達しました。

停戦の条件

2025年10月6日に発表された停戦は、外交筋では「脆弱」「不安定」「条件付き」と形容されています。しかし、これらの表現は表面をなぞるに過ぎません。条件そのものは、現地での壊滅的な力の非対称性、被った苦しみの深さ、そしてほぼ2年間にわたり国際的な基本規範が組織的に侵害されてきた程度を露わにしています。

人質交換

停戦の最も目に見える要素は、捕虜および拘留者の交換です。**ハマスは残りの20人のイスラエル人質を解放する**予定です——2023年10月のエスカレーション中またはその後に捕らえられた民間人と兵士——その代わりに、イスラエルが拘留している**1,950人のパレスチナ人拘留者**が解放されます。これには**250人の囚人**と、**起訴、裁判、または有罪判決なしに拘留されている1,700人の行政拘留者**が含まれます。

行政拘留は、国際的な法観察者によって長年非難されてきたもので、イスラエルが軍事法の下でパレスチナ人を無期限に拘留することを可能にします。解放される多くの人は**法的な代理人へのアクセスなし**で拘留されており、しばしば**秘密の証拠**に基づいて、拘留者とその弁護士の両方から隠されています。他の者は**イスラエル軍事裁判所**で有罪判決を受けましたが、これらの裁判所はほぼ100%の有罪率で運営されており、国際法に基づく最低限の適正手続き基準を侵害していると批判されています。

最も衝撃的なのは、これらの人々が拘留されていた条件です。戦争の過程、特に過去1年間で、複数の人権団体から信頼できる報告が浮上し、イスラエルの刑務所や拘留施設における**パレスチナ人拘留者に対する非人道的、屈辱的、かつしばしば暴力的な扱い**を記録しています。これには**飢餓、医療の拒否、殴打、性的屈辱、長期のストレスポジション**、そして一部の場合、**レイプ**が含まれます。数人の拘留者が疑わしい状況で拘留中に死亡しました。これらの告発のいずれも、イスラエル当局によって独立して調査されていません。

この交換は、部分的な解放ではありますが、外交的なジェスチャー以上のものです。それは占領の仕組み、パレスチナ人の存在の体系的な犯罪化、そして権利のない無期限拘留の正常化への窓です。

人道支援：1日600台のトラック

停戦の条件の下で、**イスラエルは1日あたり600台の人道支援トラックのガザへの入国を許可することに同意しました**——これは2023年戦争前のレベルを大きく下回る数ですが、最近数か月間に許可されていた量よりもはるかに多いです。停戦前には、飢饉状態と広範囲の病気にもかかわらず、1日に20台未満のトラックが入国する日もありました。

この約束は、紙の上では進歩のように聞こえるかもしれませんが、しかし、それはまた**暗黙の罪の告白**でもあります。ほぼ2年間、イスラエルはガザへの援助——食料、水、医薬品、燃料、復興資材——を組織的に阻止してきました。これは壊滅的な人道状況にもかかわらずです。この妨害は、**慣習国際人道法**、特に**規則55**を侵害し、困窮する民間人への人道支援の自由な通行を義務付けています。また、**第四ジュネーブ条約の第55条および第59条**を侵害し、占領国は民間人の生存を確保し、基本的な必需品を提供できないまたは提供しない場合に救援活動を許可するよう要求しています。

さらに、2024年には、**国際司法裁判所が暫定措置を発行し**、イスラエルにジェノサイド行為の防止と人道支援の自由な流れを許可するよう命じました。これらの措置は無視されました。

今、圧力の下で、イスラエルの援助条件の受け入れは寛大さを表すものではありません——それは**不法に回避していた義務への遅すぎる遵守**を表します。そして、トラックの増加にもかかわらず、**妨げられていないアクセス、援助従事者の安全、または80%以上の人口が避難し、多くの人が避難所や衛生施設なしで生活している地域での公平な分配の保証**はありません。

軍の再配置：ガザが53%縮小

停戦協定の第三の柱は、イスラエル軍の再配置に関するものです。**イスラエル国防軍（IDF）は、いわゆる「イエローライン」と呼ばれる一時的な境界線に撤退します**。これは**ガザの53%が引き続き直接のイスラエル軍占領下に置かれる**ことを意味します。これにより、ガザの機能的で居住可能な領域が**元の面積の47%**に効果的に縮小されます——これは大きな影響を及ぼす現実です。

この動きは、多くの観察者がすでに警告していたことを正式化します：この戦争は懲罰的なものだけでなく、領土的なものでした。イスラエルの公式な再占領の否定にもかかわらず、停戦の地図は別の物語を語ります。イスラエルの支配下に残るのは、主要な道路回廊、戦略的な水とエネルギーインフラ、農地、そしてガザの北部地域の多く——現在は住めない状態です。

本質的に、**ガザは分断されました**、瓦礫と避難だけでなく、軍事的な分断によってです。100万人以上の人々がガザ南部の狭い一帯に押し込まれ、何度も避難し、決して戻れないかもしれない家から切り離されています。停戦は、占領を覆すものではありません——それは**それを強化**します。

灰の上に築かれた停戦

これが条件です。残酷で、非対称的で、相互の合意ではなく、絶望、圧力、そして圧倒的な世界的な非難から生まれました。

これらの条件には正義が組み込まれていません——ただの生存です。まだ責任は取られていません——ただの休止です。そして「停戦」という言葉自体、この合意がなされた条件を隠します：壊滅した地域の瓦礫、標的とされた人口のトラウマ、そして法的規範と人間の尊厳の体系的な剥奪です。

次に何が起こるか——政治的、法的、道徳的に——は、世界がこの停戦を終わりと見なすか、始まりと見なすかにかかっています。

憂慮すべき歴史

すべての停戦には希望があります。銃が沈黙し続け、民間人がようやく家に帰り、子供たちが瓦礫の下で目覚める恐れなく眠れるという希望です。しかし、歴史——特にイスラエルの停戦の歴史——は、その希望を現実主義で抑えます。

イスラエルには、**停戦を破るまたは弱体化させる**長い、よく記録されたパターンがあります——時には数時間以内に、しばしば「先制的」または「防御的」とされる計算された軍事行動を通じてです。停戦の違反は紛争の一方だけに固有ではありませんが、記録は明らかです：**イスラエルは署名または仲介を助けた合意を繰り返し破ってきました**、特に軍事的または政治的な便宜がそれを要求したときです。

破られた停戦のタイムライン

年	当事者 / 仲介者	主要な条件	崩壊または違反
1949	アラブ・イスラエル休戦 (国連)	敵対行為の終了；非武装地帯	シリアの非武装地帯へのイスラエルの侵入が衝突を再燃させた。
1982	米国仲介のレバノン停戦	PLOの撤退；民間人の保証	サブラ・シャティーラ虐殺 (2,000～3,500人死亡) イスラエルが許可したフアランジストの進入後。
2008	エジプト仲介のハマス・イスラエル休戦	相互の平穏；封鎖の緩和	2008年11月4日に破られた IDFによるガザのトンネルへの襲撃；紛争が即座にエスカレート。
2012	エジプト仲介の停戦 (防衛の柱)	攻撃の停止；包囲の緩和	封鎖は続き、数か月以内に定期的な違反が再開された。
2014	ガザ戦争中の人道停戦	毎日の停戦	数時間で崩壊；両側で攻撃が再開された。
2021	「壁の守護者」後の停戦	エジプト / 米国仲介	数週間後にイスラエルの空爆が再開された。
2023年11月	一時的なガザ休戦	人質・囚人交換	2023年12月1日に期限切れ；翌日に爆撃が再開された。
2024年11月	イスラエル・ヒズボラ停戦	米国仲介の13ポイントの取引	南レバノンでのイスラエルの空爆が2025年まで続いた。

年 月	当事者 / 仲介者	主要な条件	崩壊または違反
2025 年中 旬	イスラエル・シリアの 緊張緩和	南シリアでの局地的 休戦	休戦にもかかわらず、ダマスカスとスワ イダでのイスラエルの攻撃が続いた。
2025 年10 月	現在のガザ停戦	米国の3段階フレー ムワーク	実施は不確実；ガザの大部分は占領され たままで、援助は制限されている。

違反のパターン

ほぼすべての場合、停戦の崩壊は**正当化の物語**に続きます：脅威が無力化され、トンネルが破壊され、ロケットが迎撃された。これらの正当化は精査に耐えることはめったになく、しばしば国内の政治的变化や国際的な出来事と一致するよう**戦略的にタイミングが調整されている**ように見えます。例えば、**2008年11月の停戦**は、米国選挙が終了した直後にイスラエルの襲撃によって破られました——おそらくアメリカの外交政策の予想される変化を先取りするためです。**2023年の停戦**は、短期的な有用性が尽きた瞬間に崩壊しました。

人道保護に明確に焦点を当てた合意——**2014年と2021年の休戦**など——でも、イスラエルの作戦は民間人の安全と休息の権利にほとんど配慮せずに再開されました。

2025年の停戦は、より包括的と宣伝されていますが、すでに構造的な弱さの兆候を示しています。**援助は依然として制限されており**、ガザ内の移動は厳しく管理され、**IDFの地上部隊は広範囲から完全には撤退していません**。イスラエルの指導者たちは、この停戦を「戦術的休止」と公開的に呼び、平和へのステップではない——その取り決めの一時的で使い捨ての性質を裏切る言葉です。

国際法、選択的遵守

イスラエルがほぼ完全な免責で停戦を破る能力は、国際社会からの**意味のある責任の欠如**によって可能になっています。停戦協定はしばしば国際法に根ざした言葉で交渉されますが、執行はまれです。国連の非難は拒否権で阻止されます。ICCの調査は遅延または妨害されます。そして、影響力を持つ西側諸国——特に米国——は歴史的にイスラエルを結果から守ってきました。

このパターンは、パレスチナ人の停戦への信頼だけでなく、国際法自体の信頼性を侵食します。違反が日常的になり、罰せられなくなると、停戦は平和についてではなく、**戦略的再調整**——次の攻撃前の暫定的なリセット——についてになります。

サブラとシャティーラの響き

2025年10月の停戦の条件は、包括的とはほど遠いです。即時の問題——人質交換、限定的な人道アクセス、部分的軍事再配置など——に対処していますが、不安なギャップも残していま

す。最も不穏なのは、将来の交渉段階でハマスの戦闘員が**武装解除またはガザを離れるという未解決の要求**です。

紙の上では、これは「非軍事化」へのステップに見えるかもしれませんが、しかし、実際には、それは恐ろしい歴史的重みを帯びています——**ベイルート、1982年**に響く重みです。

その年の夏、イスラエルのレバノン侵攻中に、イスラエルとパレスチナ解放機構（PLO）の間で**米国仲介の停戦**が達成されました。中心的な約束は、**PLOの戦闘員が西ベイルートを去ること**、そしてその代わりに、**パレスチナ難民キャンプの民間人の安全が保証されること**でした。米国の保証の下、国際部隊がPLOの撤退を監督するために到着しました。しかし、9月までに、これらの部隊は——その任務を完全に果たさず、時期尚早に——去りました。

その後に起こったことは、現代中東史の最も暗い汚点の一つとして残っています。

1982年9月、**イスラエル軍は西ベイルートのサブラとシャティーラ難民キャンプを包囲しました**。そして、**3日間にわたり**、イスラエル司令官は**レバノンのキリスト教ファランジスト民兵のキャンプへの進入を許可**しました。宗派的な復讐に駆られ、免責によって大胆になった民兵は、**2,000～3,500人のパレスチナ人とレバノン人の民間人を虐殺**しました——その大半は女性、子供、高齢者でした。世界は、死体が積み重なるのを恐怖で見守りました。

イスラエル自身の**カハン委員会**は、1983年に公的圧力の下で召集され、**イスラエル国防軍が虐殺に対して間接的な責任を負う**と結論付けました。当時の国防相アリエル・シャロンは、流血を防げなかったとして「個人的な責任」を負うとされました。彼は職を辞しましたが、イスラエル政治の有力な人物であり続けました。**国連総会**はさらに進み、虐殺を**ジェノサイドの行為**と呼び——その言葉は何十年も響き続けました。

サブラとシャティーラの影は、今日のガザに大きくかかっています。**現在の停戦の暗黙の提案**——戦闘員が民間人の保護と引き換えに去らなければならないという——は**1982年の偽りの保証**を反映しています。その時も今も、武装抵抗の撤退は平和への道として描かれています。しかし、歴史は、**抵抗が去り、国際的な観察者が退出するとき、取り残された人々が最も苦しむ**ことを示しています。

リスクは理論的なものではありません。ほぼ民間人がいなくなり、「安全地帯」と宣言されたガザ北部では、すでに**集団墓地が発見**されています。援助従事者やジャーナリストは、**処刑スタイルの殺害、拷問の痕跡**、そして場合によっては**救出が決して許可されなかった倒壊した建物の下に埋もれた家族全体**の兆候を記録しています。これらは孤立した事件ではなく、潜在的な前兆です。

もし停戦の将来の段階に、**ハマスの撤退または武装解除が、強固な国際的保護なしに含まれる場合、歴史は次に何が起こり得るかを正確に警告**します。

サブラとシャティーラの虐殺は、遠い悲劇ではありません。それは**前例**です——軍事力が権力の真空を悪用し、民間人が保護を剥奪され、「任務完了」と宣言した後に世界が背を向けたときに何が起こり得るかの青写真です。

1982年のベイルートの響きは、2025年のガザで今鳴り響いています。問題は、誰かが本当の意味で耳を傾けているか——そして今回、その結果を防ぐことができるかです。

イスラエルメディアの不協和

国際的な見出しが2025年10月の停戦を長く待ち望まれた突破口として称賛する中、**イスラエル国内では全く異なる物語**が広まりました——特にヘブライ語メディアで。外国人特派員が外交、緊張緩和、人道的開放について語る一方で、ほとんどのイスラエルメディアは「**停戦**」という言葉**を全く使わない**ことを避けました。

代わりに、支配的な枠組みはより狭く、取引的なものでした：**人質交換の取引**であり、政治的または軍事的な緊張緩和ではありません。この違いは単なる語彙の問題ではありません。それは、戦争がイスラエルの国境外でどう認識されているかと、国内でどう枠組みされ、擁護され、そしておそらく延長されているかの間の、より深いイデオロギー的および戦略的な不協和を反映しています。

認識の管理：停戦 vs. 降伏

イスラエル国内で「停戦」を宣言することは、**積極的な軍事作戦の終了**、爆撃の一時停止、そして一部の人には考えられない**ハマスへの譲歩**を意味します。2年以上にわたり、イスラエル政府、軍、メディアエコシステムは、ガザでの**完全勝利**が唯一受け入れられる結果であると国民に語ってきました。宣言された目標は、**ハマスの完全な破壊**、**ガザの恒久的な非軍事化**、そして数人の閣僚の言葉では、ガザ人口の「**自発的移転**」または「**除去**」でした。

今、停戦を認めることは、その物語に矛盾することです。それは、**戦争が完全勝利で終わっていない**という現実——圧倒的な軍事力にもかかわらず、**ハマスは部分的に無傷であり、ガザは部分的に立ち続け**、そして最も重要なことに、**パレスチナ人は依然として存在する**という現実を国民に直面させることです。

合意を純粋に**人質交換**として枠組みすることで、イスラエルの当局者とメディアは戦略的強さの姿勢を維持します。これは、**これが平和でも妥協でもなく、イスラエルの捕虜を家に連れ戻すための戦術的動きに過ぎない**と国民に伝えることを可能にします。

以前のレトリックとの矛盾

このレトリックの不協和は、戦争中に著名なイスラエル人によってなされた声明と対比すると特に顕著です。複数の政府閣僚、連立メンバー、影響力のある論客は、**ガザの民族浄化**を公然と呼びかけました。クネセットでの演説、ソーシャルメディアの投稿、論説記事で、ガザの未来は再建の観点ではなく、**再開発**——人口が除去され次第、イスラエルの入植地に適した「**一流のビーチフロント不動産**」として描写されました。

一部は「ガザ人なきガザ」を公然と夢見て、集団移住、恒久的占領、そして沿岸の飛び地からのパレスチナ人の生活と歴史の抹消を伴うプロジェクトを想像しました。これらは周辺の声で

はありませんでした。それらは与党連合内から生まれ、テレビのパネルで反響し、主流の言説でしばしば無批判に放置されました。

今、「停戦」や「交渉」について話すことは、**これらの最大主義的ビジョンから公に後退すること**——政治的現実への回帰が避けられないかもしれないことを認めることです。それは、ほとんど指導者が踏み出す準備ができていないステップです。

これは戦略的休止か、政策の転換か？

したがって、中心的な質問は、停戦が**本当の方針転換**を示すのか、それとも単なる**一時的な休止**——人質を取り戻し、軍事作戦を再開する前に再編成するための戦術的な小康状態——であるかです。

いくつかの指標は後者を指しています。公開声明で、イスラエルの首相と国防当局は、停戦が「**条件付きで可逆的**」であると繰り返し強調しています。言葉は戦闘的です：「**ハマスが合意を破ればガザに戻る**」、または「**これはキャンペーンの終わりではない**」。軍の報道官は、北ガザを「閉鎖された戦闘ゾーン」と引き続き描写し、撤退指定地域でIDFの部隊ローテーションが活動を続けています。

イスラエルの公共領域では、戦争の民間人の犠牲、占領の法的影響、またはガザの長期的な政治的未来についての意味のある反省の欠如は、**これがまだ清算の瞬間ではない**ことを示唆しています——それは再調整の瞬間です。

二つの現実、一つの戦争

国際舞台では、停戦は前例のない破壊の後の平和への必要なステップ、潜在的な転換点として称賛されています。しかし、イスラエル国内では、物語は前の段階で凍りついています：**戦争は必要であり、パレスチナ人は脅威であり、平和は降伏である**。

この分割画面の現実——海外での外交と国内での否定——は、次に何が起こるかについて深い疑問を投げかけます。署名者の半分がそれを名づけることを拒否する停戦は生き残れるのか？人質が交換されることは、そもそもなぜ彼らが取られたかの理由に直面せずに可能か？そして最も重要なのは、**国境の反対側の人々を消し去ることを目指す支配的な政治プロジェクトが存在する中で、平和の条件が現れることは可能か？**

イスラエルの指導部が本当に方向を変えたかどうかは、時間だけが教えてくれる——あるいは、この停戦が、これまでの多くのように、**次の破壊のラウンドの前の単なる一時停止**に過ぎないのか。

ガザの人々へ

希望します。願います。停戦が持続することを祈ります。

しかし、私はそれに命を賭けません——あなたもそうすべきではありません。

家族と再会してください。できれば祝ってください。あなたはそれ以上の価値があります。しかし、警戒を怠らないでください。食料と水の備蓄を補充してください。子供たちが再び始まった場合にどこに行くべきかを知っていることを確認してください。あなた自身も知っていることを確認してください。

なぜなら、歴史が我々に何かを教えてくれたとすれば、それはこれらの沈黙がしばしば嵐の目であり——その終わりではないということです。

国境が開き、去りたいと思うなら、準備してください。残ることを選ぶなら、準備してください。停戦は明日、来週、来月で終わるかもしれません。また避難しなければならないかもしれません。また逃げなければならないかもしれません。

そして、私はこれが本当であってほしいから言うのではありません——そうなるかもしれないから、です。なぜなら、以前にそうだったからです。

イスラエルが勝つのは嫌です。彼らがあなたの家や思い出の最後の欠片を平らにし、あなたの人生を消し去ってそれを「再開発」と呼ぶのを見るのは嫌です。しかし、あなたの人生はどんな土地よりも価値があります。**あなたはもっと価値があります。**

生き延びるために必要なことをしてください。生き延びることがあなたにとって何を意味するにしても、それを行ってください。

なぜなら、ガザは単なる地理ではないからです。砂と海だけではありません。ガザはあなたです。そして、あなたが生きている限り、ガザは生きています。

生き続けてください。

国際社会へ

今、目を背けないでください。平和を宣言して先に進まないでください。中東を——再び——イスラエルと米国が好きにできるように放置しないでください。

ガザの停戦は、脆弱で限定的ではありますが、それ自体で起こったわけではありません。それは圧力——抗議、憤慨、無視できないほどの証拠によって——によって存在に強制されました。その圧力は緩んではなりません。正義が実現するまで。

ガザに目を向け続けてください。

パレスチナに耳を傾け続けてください。

占領は終わっていません。イスラエルの兵士は依然としてガザの北部、国境、領空、援助、人口登録を支配しています。ヨルダン川西岸は依然として包囲されています。入植地は拡大し続けています。検問所は依然として日常生活を窒息させています。行政拘留は裁判なし、適正な手続きなしで続いています。そして、アパルトヘイトの仕組みは無傷のままです。

この停戦を黙る言い訳にしないでください。政府が外交を祝いながら占領の一方を武装し続けるのを許さないでください。

すべての前線で圧力をかけ続けてください。

- **イスラエルがガザとヨルダン川西岸の占領を終了するまで、国際司法裁判所が命じ、国連決議が繰り返し再確認しているように。**
- **すべてのパレスチナ人の人質——裁判なし、起訴なし、権利なしで拘留されている人々——が解放されるまで。**
- **二国家解決が単なるスローガンではなく、国境、権利、主権に基づく現実的で執行可能な現実となるまで。**
- **イスラエルの指導者——そしてイスラエル自体——が法の前に引き出され、重大な犯罪を犯した他の国家と同様に国際刑事裁判所および国際司法裁判所で責任を問われるまで。**

正義なくして平和はありません。責任なくして正義はありません。そして、世界が今見るのをやめれば、どちらもありません。

ガザの人々はニュースサイクルではありません。彼らは取り上げて捨てられる原因ではありません。彼らは国際的な沈黙、免責、選択的な憤慨の結果を生きています。

その沈黙をここで終わらせましょう。

結論——一時停止か終わりか？

この停戦は終わりと感じるかもしれません。爆弾は止まりました——今のところ。見出しは変わりつつあります。援助が少しずつ流れ始めています。いくつかの家族が再会しました。いくつかの子供たちが夜通し眠りました。

しかし、ガザにとって、パレスチナにとって、これは終わりではありません。それは一時停止です。生存と新たな暴力の可能性の間に吊り下げられた、脆弱で一時的な瞬間です。

解決されていないことが多すぎます。空気中にまだ多くの嘘が漂っています：占領が存在しない、ガザが「解放された」こと、数千人の民間人の死が何らかの自己防衛であるという嘘。世界は、病院が破壊され、ジャーナリストが殺され、近隣全体が消滅するのをリアルタイムで目の当たりにしました——そしてそれが何であるかを名づけるのに苦労しました。

しかし、名前は重要です。歴史は重要です。そして、真実はこうです：過去2年間にガザで起こったことは、対等な者同士の戦争ではありませんでした。それは「紛争」ではありませんでした。それは、閉じ込められた民間人に対する体系的で持続的なキャンペーンであり、**ジェノサイドと呼ばれました**——活動家だけでなく、**医者、学者、国連調査者、そして国際司法裁判所**によって。

この停戦は、必要ではありますが、解決策ではありません。それは行われたことを元に戻しません。死者を蘇らせません。封鎖を終わらせません。家、安全、主権を回復しません。パレスチナを解放しません。

前進する唯一の道は**正義**——本当の、国際的で、執行可能な正義——を通じてです。それは裁判を意味します。それは賠償を意味します。それは、言葉だけでなく行動による占領の終わりを意味します。それは、イスラエルの免責をあまりにも長く可能にしてきた世界からの政治的意志と政治的リスクを意味します。

もしこの瞬間が転換点となるならば、それは指導者が突然道徳を選んだからではありません。それは、**何百万もの人々**が——世界中で——見るのをやめることを拒否したからです。叫ぶのをやめることを拒否したからです。沈黙を平和として受け入れることを拒否したからです。

2025年10月の停戦は、いつか何かの始まりとして記憶されるかもしれません。あるいは、別の虐殺の前のもう一つの小康状態として記憶されるかもしれません。

その選択——今回は——イスラエルだけのものではありません。それは私たち全員に属します。